

南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌をどのように利用したか？ ——邦文論考との関係から——

志村 真幸

一 『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌におけるクエリー

南方熊楠が多数の英文論考を投稿したイギリスの『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌（以下、『N&Q』誌と略記）^{〔1〕}は、文学、歴史、民俗学、語源学、地理学などを扱う総合学術誌（一八四九年創刊、週刊）であった。この雑誌は投稿誌であり、誌面は読者同士の質疑応答で埋め尽くされ、編集部による記事は書評などに限られた。読者は文学、歴史等に関わる知見や質問を投稿し、質問への回答を書き送ったのだが、投稿の種類にはノート、クエリー、リプライの三つがあり、誌面も三欄に分けられている。ノートは「短報」で、現在の学術論文に近いものから、簡単な覚え書きまである。クエリーは「質問」で、それに対して読者が返す「回答」がリプライとなる。

本稿では、このうちのクエリーに焦点を当てて考えていきたい。クエリーは、読者が自分の知りたいことを自由に質問したもので、歴史的な人物の経歴を問うたり、文学作品について質問したり、あるいは民俗学的な問いかけ、英単語の起源、地名の質問などなど、内容は多

岐にわたった。ただし、編集部が掲載の判断をしていたため、一定の水準は保たれ、また同誌の扱う分野以外の質問は載らなかった。

クエリーを出すとは、投稿者が何らかの必要があって情報を求めているということである。著作に使う、歴史について調べている、小説を読んでいて疑問に思った、あるいは単に知的好奇心からというものがあるだろうが、ともかく、クエリーは目的意識があって出すものと位置づけられる。では、熊楠がクエリーを出した目的は何だったのか。

クエリーが掲載されると、多くのリプライが寄せられた。一本のクエリーに複数本のリプライが返ってくるのがふつうであり、ときには数年にわたって出続けることもあった。リプライの信頼度は高かった。『N&Q』誌の読者はイギリスを中心に、アメリカやヨーロッパ諸国、アジア、アフリカ、南米、オーストラリアと世界中におり、無数のアマチュア／プロの知識人が集う知的空間となっていた。そのため、クエリーを出せば、かなり確実に有用な情報が入手できたのである。

これまでの私の研究では、『N&Q』誌を辞書や事典の一種と位置づけてきた。一九世紀半ばのイギリスでは多数の雑誌が出現するが、

『ネイチャー』誌のような科学誌、『エジンバラ・レビュー』誌のようなレビュー誌、『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』誌のような絵入り誌、『ジャーナ』誌のような文芸誌、『アセニウム』誌のような総合誌など、それぞれに位置づけと読者層が異なった。そのなかで『N&Q』誌および全国にあらわれた派生誌は、知識の交換と総合化の場として機能した。やがて一九世紀末～二〇世紀初頭になると、『オックスフォード英語大辞典（OED）』や『イギリス人名事典（DNB）』、小項目主義を採用した『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第九版²）などの大辞書、大事典が次々と出るが、その前段階として『N&Q』誌のような雑誌が存在し、誌上での質疑応答を通じて情報が集められていたのである。一九世紀後半に普通郵便制度（国内、国際とも）が広まったことも、『N&Q』誌のような投稿による情報交換というシステムを支えた要因として挙げられる³。なお、現在ではネット上の質問掲示板が似たような媒体として復活、普及していると言えるだろう。

本稿では、熊楠の出したクエリーを中心に引き上げ、彼が『N&Q』誌をどのように使っていたのか、考察することにした。クエリーを出すということは、熊楠が何らかの情報を積極的、主体的に求めているわけで、『N&Q』誌への投稿の目的がハッキリあらわれているはずである。ノートやリプライではなく、クエリーを取り上げることの意味もここにある。

目標は三つあり、まず第一に熊楠がどのような問いを『N&Q』誌に投げかけているかを見たい。ここからは熊楠が『N&Q』誌にどう

いった種類の情報を求めていたのか、明らかにするはずだ。第二は、熊楠のクエリーに付いたリプライを分析することである。これにより『N&Q』誌を通じて入手できた情報の種類と傾向に迫れるだろう。そして第三は、熊楠が得られたリプライをどのように利用したかである。これについては、主として邦文論考にどのように使われたかを見てみたい。邦文との対応関係については、松居竜五が明らかにしつつあり⁴、本稿もその成果によっている。

熊楠の論考を取り上げる前に、誌上でのクエリーの位置づけ、おおまかな内容などを見ておきたい。熊楠が『N&Q』誌にデビューした一八九九年六月三日号を例に取ると、この号にはノート二〇本、クエリー二一本、リプライ四三本が掲載されている（全二〇頁）。このうちクエリーと、それに付いたリプライの内容を簡単に挙げると、『表一』のようになる。

これらを見ると、人物、歴史、文学に関するものが多く、かなり細かな事柄が質問されていることがわかる。『DNB』や『OED』ではわからないことを質問したものがあるものにも注目したい。リプライでこれらの辞書・事典への言及があるのも興味深い。なお、水平器についてのクエリーは熊楠による。また、リプライが付いたのは二一本中八本である（さらに編集部からの回答が付いたものが一本）。クエリーに対してどの程度リプライが付いたかの目安にもなるだろう。

こうしたクエリーの大部分については、投稿者がなぜこのようなクエリーを出したのか、また返ってきたリプライをどのように利用したか知るすべもない。しかし、これまでの調査から、明確な目的があっ

【表1 『N & Q』誌 1899年6月3日号に出たクエリーの一覧、およびそれに付いたリプライ】

1. チャールズ2世の肖像画に描かれた品物や言葉の意味は何か →なし	
2. 『不思議の国のアリス』のタイトルの由来は何か →なし	
3. 水平器はいつどこで発明されたか（*熊楠） →編集部からの回答。1577年。『OED』を見よ	
4. プライ提督の家系について教えてほしい →5本。1856年にも同様の質問／墓碑／生地・家系・子孫／生地／墓	
5. 14-15世紀のナイトのリストがほしい →3本。一覧／補足／補足	
6. 「passing the time of day」という言い回しの出典が知りたい →2本。シェイクスピアの時代のスラング／「おはよう」「こんばんは」等の意味	
7. ランスロット物語の聖餐について知りたい →8本。中世に何を象徴したか／参考書の提示／剣の象徴の初出など	
8. 仏領西インドの2つの家系の情報を求む →なし	
9. プロウイング協会の歌について知りたい →なし	
10. あるウェールズ人判事の情報を求む →2本。経歴と家系についての詳細な情報	
11. ある柱時計についての情報を求む →なし	
12. ホスキンスの詩について『DNB』に出ている以上のことが知りたい →なし	
13. 『OED』にも出ていないブラックキャップという語の意味が知りたい →なし	
14. ジョン・シーマンについての情報を求む →なし	
15. トマス・ハルについての情報を求む →なし	
16. ワッツ・ダントンの『エイルウィン』の由来が知りたい →10本。エイルウィンという人名／ウェールズのジブシーについて	
17. ウィリアム・ノックスについての情報を求む →なし	
18. 『ヴァージニアのいそこ』の出版者が知りたい →なし	
19. ワイズベックの身廊が二重になっているという教会について情報を求む →2本。ギリングの教会／ハニントンなど四ヶ所にある	
20. シェイクスピアの養子の自筆資料が見つかったという話の詳細が知りたい →1本。スベルが『DNB』でも間違っている。正しいスベルで探せ	
21. スコットの小説に出てくるジェントルマンの服装に関する風習を知りたい →なし	

てクエリーを出した例もいくつか明らかになっている。たとえば、『OED』の編纂に際しては、編集者のマレーが『N&Q』誌に大量のクエリーを出し、情報収集を行った。英単語の古い用例について求めるクエリーが出ると、争うようにリプライが寄せられ、採用されたものは実際に『OED』に収録されている。『OED』は『N&Q』誌を利用し、その読者を大量動員してつくられたものだったのである。同様のことが『DNB』でも行われた⁽⁵⁾。これらの大辞書、大事典は『N&Q』誌的な知的空間が生み出した最大の成果であり、投稿者たちがそれぞれの持つ知識を「実用化」させた機会ともなった。なお、マレーは先に挙げた熊楠のデビュー号でも、リプライで関連の記事を書いている。

このほか、誌面での情報収集を通じて本を執筆した例は多い。熊楠の関係で挙げれば、A・S・E・アッカーマンの『有名な誤謬』（一九〇七、一九〇九、一九二三年）という、迷信などを集めて科学的に論破した本がある。アッカーマンは熊楠にも手紙を出し、情報提供を要請するとともに、自身の著作の購入を迫っている⁽⁶⁾。

熊楠も『N&Q』誌を執筆活動に利用しており、彼の邦文論考には、しばしば『N&Q』誌からの引用が見られる。しかし、熊楠が邦文論考執筆に『N&Q』誌を使ったのはわかっていた⁽⁷⁾ものの、その詳細や厳密な対応関係は明らかでなく、本稿が初めての具体的な調査となる。

クエリーの時代的な変化についても簡単に述べておきたい。すでに触れたが、大辞書や大事典が出ると、言語や人物、百科事典的なこと

は、それらに当たれば情報が入手できるようになる。こうした事典類は市販されたほか、図書館でも利用できた。一八五〇年制定の公共図書館法によってイギリスでは各地に図書館が設立され、一九一八年の時点でイングランドに四二三館、ウェールズに六一館、スコットランドに八二館を数えるまでになる。しかも一般の図書が閉架式であったのに対して、事典等のレファレンス類は閲覧室に配架されることが多かった（熊楠の通った大英博物館のリーディング・ルームでも同様だった）。このようにして辞書や事典の利用は次第に広まったのである。それに伴って、『N&Q』誌面に出るクエリーも次第に変質していく。人名などについてのより細かな質問が増え、一九三〇年代以降になると自分の祖先について知りたいという投稿が目立って増加する⁽⁸⁾。熊楠が投稿したのは、こうした変化が進行しつつある時期で、つまり辞書や事典で調べてもわからないようなことが、クエリーで質問されるようになっていた。

二 熊楠のクエリー

それでは、熊楠はどのような目的で『N&Q』誌にクエリーを寄せていたのか。まずは熊楠自身の言葉を確認しておこう。書簡や邦文論考でしばしば『N&Q』誌について語られており、そこからクエリーを出すこと、リプライを得ることに触れた箇所を挙げた。

高木敏雄宛書簡（一九一二年四月二日付）では、『ノーツ・エンド・キリス』は英国にてもはや六十年斗りつづき居り候。（小説に多く其

名出たり。珍らしき疑問有るとき、こいつは『ノーツ・エンド・キリス』で質問ものだ(杯あり)。随筆(ノーツ)、問(キリス)、答(レプライス)より成り、文学、古学、民俗学に関する雑誌なり。日本人にては、古往近來、小生一人、特別寄書家にて、此誌を経て小生の説、諸書に引かれたるもの多し」⁽⁹⁾と語っている。「珍しき疑問」、すなわち簡単には調べられず、かつ読者の興味をひきそうな疑問が浮かんだときに、『N&Q』誌にクエリーを送るのだと述べている。また、掲載論考が各種書物に引用されていることもわかる。

「履歴書」(一九二五年一月)では、「……明治三十一年頃より小生は『ノーツ・エンド・キリス』に投書を始め、今日まで絶えず特別寄書家たり。これは七十六年前に創刊されたもので、週刊の文学兼考古学雑誌なり。今度御下問の『日本に綿の神ありや』もしくは『いずれの国かに綿の神ありや』というような難題が出るときは、この雑誌へ問いを出すなり(無賃)。しかるときは、読者の中より博識天狗の輩が争うて答弁を出す」⁽¹⁰⁾と言っている。難題が出されたときに、投稿者たちが競うようにリプライを出すさまがありありと伝わってくる。

ふたたび上松翁宛書簡(一九二五年二月三日付)を取り上げれば、「世界的にやっておるのはこの『ノーツ』に毎週書く一事」⁽¹¹⁾とあり、『N&Q』誌への投稿が熊楠にとって「世界的」な活躍を意味したことが読み取れる。なお、一九二五年には『N&Q』誌に熊楠の論考三二本が掲載されているから、「毎週」というのもあながち誇張ではない。

つづいて熊楠の投稿を見ていこう。『N&Q』誌に掲載された熊楠の論考三二四本のうち、ノートは七一本、クエリーは六三本、リプライは二五〇本となる⁽¹²⁾。リプライが多いのは、第一には雑誌自体のもつ性格によった。各号あたりの頁数はリプライ欄がもっとも多く、おおよそ誌面の半分から三分の二を占めた。これは一本のクエリーに複数本のリプライが寄せられることが多かったためである。第二に熊楠が東洋からの情報提供者として機能していた点が挙げられる。『N&Q』誌の記事の大部分はイギリス／欧米をテーマとしていたが、熊楠はそれらに対して、日本や中国の類例を提供するのをつねとしており、なかにはクエリー内で、熊楠を名指しでリプライを求めるものもあった⁽¹³⁾。こうした理由から熊楠の投稿にはリプライが多いのである。

熊楠の出したクエリー六三本について、【表2】にタイトル、掲載号、リプライの数(※熊楠自身によるリプライを括弧内に示した。みずからのクエリーにリプライするというのも不思議な話だが、補足情報を寄せることがしばしばあったためである。これは熊楠の英文・邦文ともに見られる)をまとめた。まったくリプライの付かなかったものは「なし」とした。関連する邦文論考についても書き添えた。ただし、書簡類は省略した⁽¹⁴⁾。

なお、一九一〇年代前半までは誌面の収容能力をはるかに超える投稿があったようで、編集部による掲載・不掲載の選別が行われており、熊楠の日記に投稿の記載が見られるものの、掲載されていない例が多数ある。クエリーとしては、一九〇三年二月七日に投稿した「地虫」、

【表2 熊楠によるクエリー一覧】

番号、タイトル、掲載号、リブライの数（うち熊楠自身の寄せたリブライの数）

内容

●関連する邦文論考 ☆リブライを利用したもの 発表年月日

1. 水平器の発明 1899.6.3 なし
水平器はいつどこで発明されたのか。
●「廻り香炉と扇風機」1922.9.15
2. セイウチ 1899.6.24 なし
フェルピースト『坤輿外紀』のセイウチの記述の典拠は何か。
●「人魚の話」1910.9.24-27 ●「古谷氏の謝意に答え三たび火斉珠について述ぶ（上）」1913.12
3. 「泳ぐ貝」1899.7.22 なし
ロシア、ドイツの貝占いの詳細が知りたい。
●「本邦における動物崇拜」1910.11
4. フクロウ 1903.6.13 9本
ブルタルコスにある鳥たちがフクロウを囲む話の類例を西洋に求める。
●☆「小鳥狩に梟がでる」1927.12
5. 一枚歯 1903.6.20 5本（熊楠1本）
すべての歯がつながっている奇形を日本とギリシャから紹介。本当にあるのか。
●☆「一枚歯——歯が生えた産れ児」1916.1
6. 類人猿 1903.8.29 1本
ハクスリー『自然界における人間の位置』にある猿の図は中国のもののようにだが出典を知りたい。
●「猴に関する民俗と伝説」1920
7. 嫉妬の水 1904.2.20 なし
中国の嫉妬深い妻が水神になる話の類例を西洋に求める。
8. 盗みが罪とならないこと 1904.12.24 なし
『デカメロン』にペルシャで気前の良さを示すため妻などを見せる話がある。日本では盗ませる。ペルシャのは本当か。
9. 日本におけるイスラム教 1907.3.2 なし
欧米の文献で日本にイスラム教徒がいるとする文献があるが、根拠は何か。
10. ヤギの血とダイヤモンド 1907.10.5 4本
エラスムスにあるダイヤモンドが牡山羊の血で砕けるとする俗信の典拠は何か。
11. ガーンジー・リリー 1908.11.7 3本
イギリスに咲くガーンジー・リリーはオランダ東インド会社船の難破で日本産の花が根付いたとされるが、いつのことなのか。
●☆「石蒜の話」1920.4.1
12. 親不孝者の息子 1908.11.21 なし
あまのじゃくな息子の民話は西洋や近東にもあるか。
●「親の言葉に背く子の話」1918.1
13. 処女マリアの木の实 1909.9.4 3本
ヘブリディーズ諸島で魔除けに使われる木の実の植物名を教えてほしい。
14. 聖ガラシアの实 1910.1.1 2本
『大カーンの書』にあるペルシャの木の实は何か。
15. 馬の幽霊 1911.8.12 1本
日本には馬の幽霊の話が多いが、他の国にもあるか。アーヴィングがスペインの馬の幽霊に言及してい

- るようだが、出典は。
- 「馬に関する民俗と伝説」1918
 - 16. パウサニアス 1912.6.8 1本
『パウサニアスのギリシャ誌』の著者は誰か。
 - 17. 入れかわった魂 1912.11.30 なし
日本の民話に魂が入れかわった話があるが、西洋にもあるか。
 - 「睡人および死人の魂入れ替わりし譚」1914.7、1915.1
 - 18. 「スコロペンドラ・ケタケア」 1913.5.3 6本（うち熊楠2本）
海の怪物スコロペンドラ・ケタケアの正体は何か。
 - ☆「田原藤太竜宮入りの譚」1916.1
 - 19. 「アゴンダ」と「阿古陀瓜」 1913.8.21 なし
アフリカのアゴンダという野菜の詳細が知りたい。日本にも阿古陀瓜というものの記録がある。
 - 20. 植物プレス器と虫ピン 1913.10.4 なし
植物プレス器、虫ピンはいつどこで発明されたのか。
 - 21. ディードーの土地購入 1914.1.17 6本（うち熊楠4本）
機転を利かせて広い土地を手に入れる話の西洋版をまとめた本はないか。
 - 「少しばかりを乞うて広い地面を手に入れた話」1914.1、1916.2
 - 22. 亀と雷 1914.4.4 4本（熊楠1本）
スッポンは噛み付くと雷が鳴るまで離さないというが、オーストラリアにも似た話がある。他の地方ではどうか。
 - ☆「鼈と雷」1914.4,8,12、1915.4
 - 23. 天気を占うこと 1914.4.25 1本（熊楠1本）
新年にその年の天候を占う話が日本と中国にあるが、他にもあるか。
 - 「水量をもって年の豊儉を占うこと」1916.6
 - 24. ドルイド教の現代の擁護者 1914.11.21 3本
イギリスかアイルランドにドルイド教の擁護者がいたはずだが、名前を忘れてしまったので教えてほしい。
 - 25. お歯黒 1914.12.12 なし
ロシアにもお歯黒の習慣があるらしいが、染めるのに使う調剤を教えてほしい。
 - 「涅歯について」1908.9
 - 26. 「竜燈」 1915.9.25 なし
きまった夜に水辺からあらわれて木に灯る「竜燈」は他国にもあるのか。
 - 「竜燈について」1916.12
 - 27. 寝ている人を起こす方法 1915.12.4 4本
漢訳仏典に貴人を起こす方法が挙げられているが、他国にもあるか。
 - ☆「鳥を食うて王になった話」1922
 - 28. 燐光を放つ蜘蛛 1916.4.1 なし
日本や中国では燐光を放つ蜘蛛がいると信じられているが、ほかに記録はないか。
 - 29. 米で馬を洗うこと 1916.4.8 なし
白米城の民話は日本や中国以外にもあるか。
 - 「白米城の話」1916.8 ●「白米城」1917.8 ●「馬に関する民俗と伝説」1918
 - 30. トンボ 1916.4.22 なし ＊のちに類題をノートとして投稿したものにリプライが付いている
トンボを英語でドラゴン・フライというのはなぜか。
 - 「馬に関する民俗と伝説」1918
 - 31. オオアリクイと亀 1919.5 1本

- 亀が飢餓に強いのは中国などでも知られているが、ブラジルのオオアリクイはもっと耐えるというのは本当か。
32. 教会が穀物の種を貸し出すこと 1920.1 なし
ヨーロッパには飢饉の際に穀物の種を貸し出す教会があるというが、詳細が知りたい。
33. 猿酒 1920.6.12 2本（熊楠1本）
猿が酒をつくるという話は日本以外にもあるか。
●「猿に関する民俗と伝説」1920.5.11
34. 「大酒飲み」 1920.9.11 1本
ヤシ酒を好み、「大酒飲み」と呼ばれる動物は何か。
35. 「紀元前」を意味するBC 1920.11.20 なし
この略語が、英語の文献に最初にあらわれたのはいつか。
36. 雪虫 1920.11.27 なし
アルプスや中国、日本には雪や氷の中にすむ虫についての記録があるが、このうちアルプスの詳細が知りたい。
37. フォスコットの乙女たち 1920.12.4 なし
ピープスの『日記』のフォスコットの乙女たちは、何年に生まれたとされているのか。
38. サクランボを食べることについての諺 1921.3.5 1本
「殿様たちとサクランボを食べると、種が当たって眼が飛び出る」という諺について詳細が知りたい。
39. コルシカの軍用犬——鶏の島 1921.5.14 なし
中国文献にあるコルシカの軍用犬についての情報の出所は何か。
●「犬に関する民俗と伝説」1922.2
40. ムカデ 1921.5.21 なし
日本や中国ではムカデを神聖である、あるいは幸運のしるしとみなすことがあるが、他でもあるか。
●「本邦における動物崇拜」1910.11
41. 「イカリソウ」 1923.10.20 2本
イカリソウは、なぜ英語では「実のならない草」と呼ばれているのか。
42. 義眼 1924.5.24 なし
中国では九世紀には義眼が発明されていたが、ヨーロッパではいつか。
●「入れ目」1924.5.1
43. ガネーシャ——象と鼠 1924.5.24 2本（うち熊楠2本）
インドのガネーシャは鼠を眷属とする、あるいは罰するとされる。中国では象は鼠を恐れるとするが、類例はないか。
●「鼠に関する民俗と信念」1924.1
44. 馬と水牛 1924.12.13 なし
インドでは馬と水牛が反発しあうとされるが、他でも言われるか。
45. 鳥の雌雄 1925.4.4 なし
中国の例を挙げた上で、鳥の雌雄を見分けるのに性器や性行動を観察する以外の方法があるかと質問。
46. ミイラ取り 1925.6.13 なし
後藤梨春『紅毛談』に出ている、インドの乾燥地で行き倒れてミイラになってしまう話の原典は何か。
●「ミイラについて」1926.9.30
47. 首なし馬 1925.6.20 なし
首のない馬の幽霊が人間を伴わずにあらわれる例がヨーロッパにもあるか。
●「馬に関する民俗と伝説」1918
48. 神秘的な像 1925.6.20 11本（熊楠2本）
鑑賞者を追いかけてくるように動く肖像画／像の例を知りたい。またその仕組みの説明も。

49. 指の爪による予言 1925.7.25 4本
爪にできる白い斑文を日本やカンボジアでは吉兆／凶兆とするが、ヨーロッパでもあるか。
50. 鳥が火事をおこす 1925.11.7 なし
●「牛王の名義と鳥の俗信」1916.10 ●「戦争に使われた動物」1916.12
51. 紋章におけるヤドリギ 1925.11.21 2本
日本では紋章にヤドリギを使うが、ヨーロッパでもあるか。
52. フォークロア——盗まれるとよく繁茂する植物 1926.10.9 なし
和歌山ではネギの一種などは盗んで植えるとよく育つと言うが、ヨーロッパでも類例はないか。
53. 牡鹿と蛇 1927.5.28 1本
鹿が蛇を食べることについてのヨーロッパの比喩表現を質問。
54. 「指金」 1928.3.24 なし
日本には女の子の指を細くするためにはめる「指金」があったが、他国にもあるか。
●「指かね」1928.2,4,7
55. フォークロア——仔を連れて川を渡る母虎 1928.5.12 5本（熊楠1本）
日本には、凶暴な仔とおとなしい仔を連れた母虎が川を渡るにはどうしたらいいかという問題があるが、類例はないか。
●☆「虎の子渡し」執筆年不詳
56. フグの看板 1928.7.21 なし
欧米では生牡蠣の店にハリセンボンの看板がかけられるが、その意味は何か。
57. 「燐光の観察」 1929.4.6 1本
プリニウスの「燐光の観察」はボン・クラシカル・ライブラリー版では省略されているのか。
58. 濾石 1929.4.27 1本
江戸時代にオランダからもたらされた濾石の歴史や性質を知りたい。
59. ライチョウに関する中世の記述 1929.9.7 1本
ライチョウについての記録は13世紀フランスの文献にあるのが最古か。また墮落する鳥と書かれているのは本当か。
60. 盗癖に効く薬 1929.10.19 なし
名医が盗癖に効く薬として、せきが出るようになる薬を渡したという日本の民話を紹介し、類話を求める。
61. トゲがなくなった植物 1930.5.17 2本
イタリアや日本には聖人が触れたりしたことでトゲがなくなった茨や柃の伝説があるが、他にもないか。
62. 驚異的な記憶力 1930.5.24 5本
中国と日本には、染物屋の注文控え帖が焼けてしまったのを、驚異的な記憶力で復元したというような話がある。類話がないか。
●未発表草稿「失うた帳面を記憶力で書き復した人」
63. パウローニアという名のオランダ王女 1930.12.13 1本
桐の学名のもととなったオランダ王女について詳細を知りたい。

一九〇七年四月二八日に投稿した「牛乳の血」など七本がわかって
いるが、草稿も残っていないため、内容は不明である⁽¹⁵⁾。

掲載されたクエリー六三本の内容を見ると、おおよそ二つの質問傾
向が確認される。第一は、日本や中国の民話、伝説、民俗、風習を示
し、似たような事例が欧米（あるいは世界）にないか質問するもので
ある。たとえば、7「嫉妬の水」で日本と中国の、嫉妬深い妻が水神
になったという民話の類話を西洋に求めるものが挙げられる。あるい
は、25「お歯黒」のように、日本のお歯黒に似た習慣がロシアにもあつ
たとの記述を何かの本で見かけ、より詳しい情報を求めた例もある。
これらについては、以前から繰り返し指摘してきたように、熊楠が日
本と中国を基盤に据えつつ、全世界的な視野で民俗学研究を行って
いたこととピッタリ適合する。世界各地の民話や風俗習慣から似たよう
な事例を見出し、羅列・比較するのが熊楠の民俗学研究の方法であつ
た⁽¹⁶⁾。

第二が、30「トンボ」で、英語でドラゴンフライというのはなぜか
というように、イギリス／西洋のことをストレートに質問するタイプ
である。しかし、「トンボ」の場合でも、竜の皮からトンボが生まれ
たという中国の民話に言及しており、その背後に比較民俗学的関心が
あった点は共通している。もちろん、16「パウサニ阿斯」や24「ドル
イド教の現代の擁護者」など、そうでない例もある。

以上から、熊楠のクエリーは比較民俗学的な関心から、西洋の類例
を求めるような質問が多かったと言えるだろう。加えて、熊楠のクエ
リーには東洋のみならず、西洋の例も示したケースが多いことも指摘

しておきたい。つまり、所蔵する洋書を調査したうえで、さらに足り
ない情報を要請しているのである。

三 熊楠へのリプライ

次に、熊楠のクエリーへ寄せられたリプライを見てみよう。

リプライの付いたクエリーは三二本であった。ただし、熊楠自身し
かりプライしていないものは実質的に反応がなかったと考えていいだ
ろうから、誰かが回答してくれたものが三〇本、答えの出なかったも
のが三三本となる。リプライがもらえたのは五割以下だが、これは【表
1】で確認した、クエリーにリプライの付く割合とほぼ同じくらいに
なる。熊楠のクエリーが特に回答しやすい、もしくは回答しにくいと
いうことはなかったようだ。

リプライがもつとも多く付いたのは、48「神秘的な像」で、一本
（うち熊楠二本）となる。つづいて、4「フクロウ」の九本で、その
ほか5「一枚歯」、18「スコロペンドラ・ケタケア」、27「寝ている人
を起す方法」、49「指の爪による予言」、62「驚異的な記憶力」に反
響が大きかった。

熊楠のクエリー「神秘的な像」は、アーヴィングの『スケッチ・ブッ
ク』から、「使用人たちは、大広間に掛けられた戦士の肖像画に、何
か超自然的な力があると信じていた。というのも、大広間のなかでは、
どこに動いても、この戦士の目がずっと追いかけてくるのだからと使
用人たちは述べた」という一文を紹介し、次に日光の眠り猫が同じよ

うな特性を備えていることを挙げ、さらにヘディンが『ヒマラヤをこえて』で似たような例について、「窓から入ってきたすきま風が幟を動かしたことで、神々の像の顔の上の影が変化し、動いたように見えただけだったのだ」と説明しているのを引き、「このような像の例はほかにもないだろうか。ヘディンの説明はこうした働きのすべてにあてはまるのだろうか」⁽¹⁷⁾と質問している。

これに付いたリプライを【表3】に示したが、ヨーロッパ各地の例が寄せられたほか、科学的な説明もなされており、熊楠のクエリーに対して十全な回答となっている。まさに期待どおりの情報が得られたと言えよう。

このほか、詳細には取り上げないが、4「フクロウ」、5「一枚菌」、18「スコロペンドラ・ケタケア」、27「寝ている人を起こす方法」、49「指の爪による予言」、62「驚異的な記憶力」を見ても、リプライで世界中から類例が寄せられており、熊楠の狙いどおりの結果となっている。

イギリスの事例を尋ねた例としては、【表4】に24「ドルイド教の現代の擁護者」をまとめた。ここでは「イギリスかアイルランドの現代の著述家で、古代のドルイド教を擁護したために世間の非難を浴びた人物について、どこかで読んだのを覚えている」⁽¹⁸⁾のだが、その人物や本について忘れてしまったので詳細を教えてほしいと述べている。これには一二月五日号で同時に三人からリプライが寄せられたが、内容は二種類に分かれ、「半ウェールズ人」というペンネームの投稿者からはバン・ジョーンズ博士である、ジョンソンとサルモンからは

プライス博士であると回答された。さらに編集部からも注記が付き、一九一一年に誌面で行われた質疑応答「プライス博士、ドルイド僧」を参照するよう勧められている。回答が割れたのは、一九世紀イギリスでドルイドに傾倒する人物が少なくなかったためであろうか。とはいえ、熊楠の要求にきちんと応えた情報提供がなされているのは事実である。

なお、全体的に見ると、多くのリプライが寄せられた場合は、おおむね充実した情報が得られている。もちろん、16「パウサニ阿斯」のように、ウィリアム・ピートが「翻訳者はトマス・タイラーで一八二七年版は、一七九四年版に出た『プラトン主義者』のリプリントである」⁽¹⁹⁾と回答したように、一本のリプライですっきり解決することもあった。

では、逆にリプライの出ないクエリーとはどのようなものだったのか。まず、7「嫉妬の水」、17「入れかわった魂」、29「米で馬を洗うこと」、40「ムカデ」など、日本や中国の民話や俗信に関して他地域の例を求めたクエリーの場合は、類話が見つからなかったのではないかと考えられる。そもそも熊楠が手元の洋書類で探しても出てこなかった件を尋ねているのだから、無理もない。とはいえ、熊楠にとつては類例が「ない」というのもひとつの収穫だっただろう。

それから、25「お歯黒」、39「コルシカの軍用犬」のように、ピンポイントで情報を求めたものもリプライが出にくいようだ。

ちなみに、熊楠はクエリーにリプライが返ってくるか気にしていたようで、日記にまめに記している。たとえば一九二五年九月一四日の

【表3 「神秘的な像」に付いたリプライ】

- クエリー 南方熊楠 1925.6.20
- ① A. H. Cooper-Prichard 1925.7.11
ヨーロッパ各地に、同じような、見る者を見つめてくるとされる肖像画がある。
- ② C. Nelson Stewart 1925.7.11
吸血鬼を描いた肖像画にそうしたものがある。
- ③ Montague Summers 1925.8.1
アンコーナには目を動かすマリア像があった。カトリック圏には同様の像がたくさんある。
- ④ A. S. E. Ackermann 1925.8.1
出版予定の自著でも扱うつもりだが、そうした現象には何のトリックも神秘もなく、鑑賞者自身の鼻が邪魔しなければ、描かれている人物がこちらを目で追ってくるように見えるだけだ。目の開閉は、網膜に映った残像のせいではないか。
- ⑤ Herbert Maxwell 1925.8.1
絵のモデルとなった人物が画家をまっすぐ見つめる位置をとって描かれた場合には、鑑賞者の立つ場所によらず、見つめられているように見える。
- ⑥ H. Prosser Chanter 1925.8.1
そうした像には宗教的な意味合いがあり、クリスマスなどにはしばしば、雑誌に絵が出たり、店頭飾られたりする。
- ⑦ L. R. M. Strachan
ドイツの雑誌に出たラゲーザのフランシスコ会の教会の写真に、目が動く木製の聖母マリア像が写っている。
- ⑧ E. St. John Brooks 1925.8.22
オックスフォードに同様の絵があり、『オックスフォードシャー誌』ではアッカーマン氏と同じような説明がされている。
- ⑨ A. H. Cooper-Prichard 1925.9.19
画家たちもこうした効果についてはよく知っていたはずだ。また、紙を顔のかたちに切り抜き、夜、ランタンを使って影絵にする遊びが、私が子どもの頃にいたカリブ海地域で行われていた。
- ⑩ 南方熊楠 1925.9.19
プリニウスに出ているミネルヴァ像が最古の例。9世紀中国には目を開けたり閉じたりするように見える肖像画を描く術があった。
- ⑪ 南方熊楠 1928.5.12
京都の真如堂で蝦蟇仙人の像の目が動くようになったことがあったが、結局のところ、眉の部分に貼られていた布がはがれかけ、瞳の前に垂れ下がっていたためだとわかった。

【表4 「ドルイド教の現代の擁護者」に付いたリプライ】

- クエリー 南方熊楠 1914.11.21
- ① Half-Welshman 1914.12.5
19世紀に著作のなかで『ウェールズのドルイドの長』と自称したパン・ジョーンズ博士である。
- ② H. H. Johnson 1914.12.5
ウェールズの医師プライス博士が、19世紀後半、息子が死んだときに丘でドルイド教の儀式を行ったという。
- ③ David Salmon 1914.12.5
プライス博士。「ウェールズの大ドルイド僧」と自称した。

来信欄には、「ノーツエントキーリス八月十五日分 英国 状一」／p.122 Theodore Besterman の予の間爪占に対する答え ／L. R. M. Strachan の眼動く像に対する答え出づ」とある。

四 邦文論考との関係

邦文論考との関係に進もう。【表2】には関連の邦文論考を●で示した。ただし、熊楠はひとつの論考のなかで多様なテーマや材料を扱うことが多く、また論旨も散漫で脱線しがちなため、英文と邦文でピツタリ一致するような論考は稀である。共通の要素が見られるという点で判断した。クエリーのうち三〇本には、何らかの形で邦文の関連論考（総数三四本）がある。リプライが付いたものに限れば、クエリー一二本に対して邦文論考一二本となる。

邦文三四本のうち、英文が邦文に先んじて書かれたものは二二本、ほぼ同時（前後一ヶ月程度。掲載時期から推定）は五本、英文が邦文より後は四本、不明が一本である。英文↓邦文のケースが多かったことがわかる。熊楠としては、英語で書いたものを日本向けに直して発表するという意識が強かったのだろう。

もっとも早い邦文は、一九一〇年九月二四～二七日の『牟婁新報』に出た「人魚の話」で、一八九九年に書いた2「セイウチ」が使われている。その後もしくはらばは英文↓邦文ばかりとなる。

英文と邦文が並行して執筆された例は、一九一四年一月の21「デイドーの土地購入」が最初で、それから22「亀と雷」、33「猿酒」、42「義

眼」、47「首なし馬」、54「指金」となる。

邦文のが早い例は、一九一四年二月の25「お歯黒」が最初で、それから40「ムカデ」、43「ガネーシャ——象と鼠」、50「鳥が火事をおこす」となる。

ここからは、一九一四年までは英文↓邦文の意識が高く、邦文と英文の並行執筆ないしは邦文↓英文という発想は、いずれも一九一四年にあらわれたことが読み取れ（クエリーに関しては、だが）、この時期に英語論考と邦文論考の位置づけや意味合いが変化した可能性が指摘できる。ただし、時期的な偏りがあり、一九一四年と、一九二四～二五年に同時並行ないしは邦文が先んじる傾向が強い。一九二四～二五年については松居竜五も指摘しており、この頃には英文と邦文で同内容の論文がほぼ同時に執筆されたことがわかつている⁽²⁰⁾。とくに一九二四～二六年の『日本及日本人』に出た論考には、英文論考と重複した内容が多い。一九一四年は一七本、一九二四年は二五本、一九二五年は三三本と、もっともさかんに英文で執筆していた時期であり、そのことが関係しているのかも知れない。

五 リプライの邦文論考への利用

最後に、熊楠がリプライで得た情報を邦文論考にどのように利用したかを確認したい。

関連の邦文論考のうち、リプライの内容を取り込んで書かれているものには、【表2】で☆を付けた。七本があり、以下が一覧となる。○

内には英文と邦文のあいだに何年の隔たりがあるかを示した。英文4「フクロウ」↓邦文「小鳥狩に梟が出る」(二四年)、5「一枚歯」↓「一枚歯——歯の生えた産れ児」(一三年)、11「ガーンジー・リリー」↓「石蒜の話」(一二年)、18「スコロペンドラ・ケタケア」↓「田原藤太竜宮入りの譚」(三年)、22「亀と雷」↓「鼈と雷」(四ヶ月)、27「寝ている人を起こす方法」↓「鳥を食うて王になった話」(七年)、55「フォークロア——仔を連れて川を渡る母虎」↓「虎の子渡し」(不明)。

まず指摘しておきたいのは、リプライを取り込んだものの数の少なさである。クエリーにはそこそこリプライが付き、またクエリーを邦文にしたものはそれなりに数があるのに、せっかく得たリプライをあまり使っていない。これはどうしたことか。

最初の「フクロウ」から見ていこう。英文「フクロウ」は、一九二七年一一〜一二月の『彗星』(二年一一、一二号)に「小鳥狩に梟がでる」として出た。本文では「明治三十六年、予、那智山下に侘しく暮らすうち、出した一書がその歳六月ロンドン発行の『ノーツ・エンド・キーリス』九輯一一巻四六七頁に出た」⁽²¹⁾として「フクロウ」の内容を紹介していくのだが、英文で挙げたプルタルコスや『鳥鷲合戦物語』に、新たに『涅槃経』と『パンチャタントラ』を加え、最後は英文と同様に「読者中には、梟に紙袋をさせて栖り木に止まらせた日本の戯画をみた人がある。これが木菟網を描いたのだ、と(已上熊楠の質問)」と結んでいる。「已上熊楠の質問」とは、これが『N&Q』誌に出たクエリーの全文という意味だろうが、もとの「フクロウ」には『涅槃経』や『パンチャタントラ』は出ておらず、実際には後年

見出した情報を書き加えている。つづいてリプライが取り上げられ、「これに対して、『語源学的英語辞典』の著者スキート大博士や、ミュニツヒのマクス・マウス博士や、博覧で聞こえた英人マクマイケル氏等九人より答文を獲た。一々訳出は望むべからずだから、面白そうなところを撰集して述べると、古いところでは二世紀にエリアヌスが書いた『動物の天性』一卷二九章に、昼間諸鳥が梟を嘲ることを記し、チヨーサーはカケスや鵲が梟を嘲る由をのべ、沙翁の『ヘンリー六世』や、ゲイの『譬喩譚』……ブッフォンの『博物学』」⁽²²⁾と紹介している。なお、エリアヌスはマウス(『N&Q』誌、一九〇三年六月二七日号、五一八頁)、『ヘンリー六世』はスキート(同、五一七頁)、ゲイはホイラー(同、五一七〜五一八頁)、ブッフォンはセント・スウィシン(同年八月八日号、一一三〜一一四頁)が紹介したものであった。九本というリプライの数も正しいし、かなり詳細にリプライの内容も紹介されている。索引など使いつつ、所蔵するバックナンバーを丹念に当たったのであろう。

しかし、「フクロウ」から「小鳥狩に梟がでる」までに二四年もの年月がたっている点は見逃せない。熊楠が一九〇三年に「フクロウ」を質問したとき、邦文での執筆に利用しようとの意図があったとはとても考えられない。

二番目の「一枚歯」も、邦文論考「一枚歯——歯が生えた産れ児」にしたのは一九一六年になってからで、「予これら諸例を萃めて、かかること實際世にありやと問いを出せしに(拙文“Single Tooth”, Notes and Queries, 9th ser.xi, p.488 London, 1903)ゝわずかに三答を得

た」⁽²³⁾として、ベンズリー、モーガン、フォーシヨウからのリプライの内容を簡単に紹介している。しかし、こちらも一三年もの間が開いている。

ほかの例を見ても、七件中六件までは数年〜二〇年以上の間があり、熊楠が邦文論考への利用を目的にクエリーを出したのではないであろうと考えられる。

リプライを取り込んでいる邦文論考のうち、英文から間を置かずして執筆されたのは、「亀と雷」↓「鼈と雷」のわずか一本にすぎない（表5）。邦文「鼈と雷」は、一九一四年四月の『人類学雑誌』（二九巻四号）に最初の一本が掲載されたのを皮切りに、次々と投稿され、計四本が出た。最初の一本は、英文のクエリー「亀と雷」と、四月二五日号に出た熊楠自身によるリプライ「亀と雷」の二本をまとめた内容となっている。つづく「鼈と雷」二〜四本目は、『N&Q』誌に出た他の投稿者によるリプライを追補として紹介したものだった。二本目は、同年八月の『人類学雑誌』二九巻八号に『人類学雑誌』二九巻四号一六〇頁の拙文を英訳して、『ノーツ・エンド・キークリス』へ出したところ、今年四月二十五日の同誌三三五頁に、ノルウィッチのヒブゲームなる人応えていわく。米国ヴァージニア州の黒人および多少の白人も、鼈が物に咋いつくと雷が鳴らねば放さぬ、と信ず」⁽²⁴⁾とヒブゲームのリプライをほぼそのまま日本語にしている。ちなみにヒブゲームと熊楠のリプライは『N&Q』誌四月二五日号に並んで掲載されているが、熊楠がリプライを投稿したのは三月二五日で、邦文でズレてしまうのは当然のことになる。なお、日本から熊楠が投稿し、『N

【表5 「亀と雷」に付いたリプライ】

クエリー 南方熊楠 1914.4.4

① Frederick T. Hibgame 1914.4.25

ヴァージニア州の俗信で、亀は噛み付くと、雷が鳴るまで離さないとされる。蛇は雷が鳴っている間は毒を注入できない。

② 南方熊楠 1914.4.25

グベルナティス『動物神話学』によれば、ギリシャ神話で亀と雷が結び付けられている。

③ Edward Bensly 1914.9.12

オルコットの著作に少年が罵り言葉として「サンダー・タートルズ！」と叫んだ例がある。語呂のせい、意味があるのかは不明。

④ H. H. Johnson 1915.1.16

アメリカのアルゴンキン族、ペルシャに類例がある。

&Q』誌に掲載され、さらに熊楠の手元に届くには二ヶ月半ほどかった。一二月の二九卷一二号に掲載された邦文の三本目では、「もと南濠州アデレード大学古文学教授だったペンスリー氏より教示に、米国のルイサ・メイ・オルコット女史の一著（たぶん一八七一年に出た『リッル・メン』）に、誓言を好む童子みずから悪詞を用うるを止めんとて、その代に雷鼈という語を用い出すことあり……」⁽²⁵⁾と書かれている。さらに翌年四月の三〇卷四号に出た四本目では、「鼈と雷に関して『ノーツ・エンド・キークリス』に出した予の疑問に対し、一月十六日のかの誌五二頁にエチ・エチ・ジョンソン氏答えていわく、ペルシア語で亀をサング・ブッシュ（石の背）と言う。諸国に石や燧石や石鏃を雷の記号とする民族が多い。よってこれらの意味が雷と亀・鼈と密に相かわるという信念を生ぜしめたのだろう、と」⁽²⁶⁾とされている。リプライが出るごとに追補を書き送っており、内容や人名にもミスがない。

このようにリプライを用いれば、邦文論考の情報量を豊かにし、内容的にも深めていくことが可能だった。しかし、それは熊楠にそうした意志があればこそで、実際にはこれ一回に留まった。

リプライのもっとも多く付いた48「神秘的な像」についても取り上げておきたい。熊楠はこれを邦文論考にしていない。リプライを利用するどころか、自身がクエリーで列記した事例をまとめることもなかった。ただし、一九二五年一月三日付の上松翁宛書簡で、「日本では一向聞こえぬが今年夏小生一問題を同誌に出し種々と論戦出でにぎわい申し候。それは日光の左甚五郎の眠猫像で、他にもワシントン・

アービングの『スケッチ・ブック』に出た十字軍の騎士、またスヴェン・ヘジンがチベットで見た天部諸像などの例あり、どこから見ても見る人の顔を見る画または彫像なり。……それに付いてロンドンの日本大使館に出入するスチュアルトとかいう人の説には、カソリック寺に（ことにローマに）久しくみつめおると眼を開いたりふさいだりするマドンナ像の画が多くあり……」⁽²⁷⁾と紹介している。このうち眠猫、アービング、ヘジンは熊楠がクエリーで挙げたもので、マドンナ像についての箇所がリプライで得た情報となる。ただし、「スチュアルト」と述べているのは熊楠の間違いで、これはクーパー・プリチャードのリプライである⁽²⁸⁾。ネルソン・スチュアートの論考はその次に載っており、吸血鬼を描いた肖像画について書いている。きちんと誌面を確認しなかったのだろう。個人的な書簡とはいえ、雑な仕事をしている。

このようにして見ると、熊楠には邦文論考執筆のための情報収集の意図はほとんどなかったように思えてくる。とはいえ、まったくなかったわけではないようで、たとえば39「コルシカの軍用犬——鶏の島」は、中国の『大清一統志』から、「意大里亜（イタリア）には、有名な三つの島がある。……ひとつは哥而西加（コルシカ）と呼ばれ、全部で三三の城があり、優れた闘犬を産する。どの犬も一頭が一人の騎兵に匹敵するので、この島の人々は一騎ごとに一頭のイヌを配置するという戦術をとる。そして時には、騎兵より犬のほうがよく戦うこともある。熱奴亜（ジエノア）の近くには、鶏島があり、島中に鶏が生息し、誰かに飼われるということもなく繁殖しているが、野生の鶏とは明ら

かに異なっている」と引用して、「言葉の使われ方からすると、ヨーロッパの書物から翻訳されたもののようなのである。どなたかご教示いただけないだろうか」⁽²⁹⁾と尋ねるクエリーであった。『N&Q』誌の一九二一年五月一四日号に掲載されたのだが、ちょうど熊楠が『十二支考』を毎年執筆していた時期（一九二一年は酉年、一九二二年は戌年）で、前半部分は戌年に、後半部分は酉年の原稿に利用しようとした可能性がある。ただし、リプライは出ず、結局「犬に関する民俗と伝説」で、「そのころの西洋地理書から訳出したものらしいが、欧州の博識連へ聞き合わせたるも今に所拠が知れぬ」⁽³⁰⁾と述べている。現在では、これは一七世紀のイタリア人宣教師ジュリオス・アレーニ（艾儒略）が一二三三年に中国語で著した世界地理書『職方外紀』から取られたものと判明している⁽³¹⁾。

17「入れかわった魂」も同様で、一九一四年七月の『人類学雑誌』（二九巻七号）に発表した「睡人および死人の魂入れ替わりし譚」で、「一九二二年十一月三十日の『フーツ・エンド・キリス』に出だし、西洋にもかかる譚ありやと問いしも、一答だに出でざりし。ただし、支那に類話あるを近日自分見出したればここに掲ぐ」⁽³²⁾としている。ただし、これもクエリー投稿からは一年半ほど間が開いており、また中国の類話が見つかったので書いたと述べている点からすると、邦文執筆を目的とした問いあわせだったかは、どうも怪しい。そのほか「竜燈」や「ミイラ取り」も邦文論考執筆のために書かれたものの、リプライが得られなかった可能性があるが、慎重に考える必要があるだろう。

やや話はズレるが、邦文が先に書かれ、後に同内容のクエリーが出たケースについても執筆年の隔たりを確認しておこう。邦文「涅槃について」↓英文25「お歯黒」（六年）、「本邦における動物崇拜」↓40「ムカデ」（一一年）、「鼠に関する民俗と信念」↓43「ガネーシャ——象と鼠」（四ヶ月）、「牛王の名義と鳥の俗信」↓50「鳥が火事をおこす」（九年）。こちらも接近して書かれたのは「鼠に関する民俗と信念」↓「ガネーシャ——象と鼠」があるにすぎない。邦文で書いていて疑問に思ったこと、足りない情報について、すぐさま『N&Q』誌に問い合わせたわけではないのである。熊楠において、英文と邦文の関係性はきわめて薄弱だったようだ。

もうひとつ指摘しておきたいのは、邦文に直された英文には時期的な偏りが見られる点である。邦文「小鳥狩に梟が出る」↓「一枚歯——歯の生えた産れ児」「石蒜の話」「田原藤太竜宮入りの譚」「鼈と雷」「鳥を食うて王になった話」の六本は、もともとなる英文はいずれも一九一五年以前に執筆されたものを使っており、「虎の子渡し」のみ、英文が一九二八年と遅い時期になる。しかし、これについて現時点では有効な説明はできていない。

おわりに

クエリーを『N&Q』誌に出し、リプライで得られた情報を邦文論考に使うというのは、便利で効率的な方法に思える。とくに日本に住む熊楠が西洋の類例を集めようとするには有用だったはずだ。熊楠の

所蔵した洋書は約一八〇〇点と数が少なく、しかも半数近くは植物学関係で占められている。おのずから得られる情報には限りがあり、『N & Q』誌が蔵書代わりに機能した可能性は高い。実際に邦文論考には『N & Q』誌からしばしば引用されている。ところが、本稿で明らかになったのは、予想とはまったく異なる事実であった。

熊楠はクエリーを六三本も書いたにも関わらず、リプライで得た情報で邦文論考に盛り込んだ例はわずか七点しかなく、しかも英文の投稿から間を置かずに執筆されたものは一点のみになる。このことからすると、熊楠が邦文論考執筆のためにクエリーを出していたとは考えづらい。なお、本稿では触れなかったが、英文論考執筆のためにクエリーを利用した形跡もない。クエリーを出し、リプライを取り込んで新たな英文に仕上げるといったことはしていないのである。熊楠は質疑応答誌としての『N & Q』誌の価値をまったく役立てていなかったことになる。

では、熊楠はなぜクエリーを投稿したのか。この点については、まだハッキリしたことは言えない。ただ単に頭に浮かんだ疑問をクエリーとして投稿していただけたのだろうか。リプライをもらって活用するというよりは、投稿すること自体が目的だったのかも知れない。ともかく、本稿で明らかになった熊楠のクエリーに関する事実をもとに、彼の英文論考について改めて考える必要があるのは確かだろう。

(1)

熊楠の著作は、英語・日本語を問わず、論考と呼ばれることが多い。現在の学術的な論文とは、あまりにもスタイルが異なるためである。テクストは『N & Q』本誌、オンライン版、邦訳『南方熊楠英文論考(フーツ・アンド・クエリーズ)』誌篇を用いた。タイトルや人名については、邦訳に従っている。『N & Q』誌の巻号数については、原則として発行日を示した。

『N & Q』誌についての研究は、以下を参照されたい。

・拙稿「南方熊楠と『フーツ・アンド・クエリーズ』誌——Footprints and Gods, &c.——から「ダイダラホウシの足跡」へ」『ヴィクトリア朝文化研究』七、二〇〇九年。

・拙稿「フーツ・アンド・クエリーズ」誌と大辞典の時代——『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠」『歴史文化社会論講座紀要』八、京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座、二〇一一年。

・拙稿「フーツ・アンド・クエリーズ」誌掲載論文の中のアジア」『南方熊楠とアジア』田村義也・松居竜五編、勉誠出版、二〇一一年。

・拙稿「フーツ・アンド・クエリーズ」誌のなかの日本——南方熊楠と日本関連論考」『歴史文化社会論講座紀要』九、二〇一二年。

・『完訳 南方熊楠英文論考(フーツ・アンド・クエリーズ)』誌篇『飯倉照平・志村真幸・田村義也・中西須美・前島志保・松居竜五訳、集英社、二〇一三年出版予定。

ノート、クエリー、リプライの別は投稿者が指定した。熊楠の草稿でも冒頭に明記されている。日記を見ても、たとえば一九二七年四月一二日の発信欄に、「夜十時頃下女出す Editor of Notes and Queries へ」Query: The Harts & the Serpent.」とある。ただし、リプライと

して投稿されたものが編集部判断でノートとして掲載されることはあった。しかし、クエリーとして出されたものがノートとなったり、あるいはリプライとして出されたものがクエリーとなったようなものは確認されていない。クエリーは文中に質問をふくむ、短文が多いなどの特徴があり、一見して判別できる。

(2) 百科事典には大項目主義と小項目主義とあり、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』は一七六八〜七一年に出た第一版以来、大項目主義であったが、次第に項目数を増やしていき、一八七五〜八九年の第九版(T・ペインズ編纂)で小項目主義に移行した。熊楠が愛用したのも第九版である。

(3) 拙稿『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代、拙稿『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文の中のアジアなど。

(4) 『南方熊楠英文論考(ノーツ・アンド・クエリーズ)』誌篇。

(5) 拙稿『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代。

(6) 一九一九年一月一日〜一九三四年一月一日付けの書簡五通が残っており、一九三三年版『有名な誤謬』の出版予告も同封されている。

(7) 岩村忍「南方熊楠の英文著作」『南方熊楠全集』一〇巻、平凡社、一九七三年、四一二頁。『南方熊楠大事典』勉強出版、「丸」の項、二〇一二年、など。

(8) 人名事典に掲載されないようなマイナーな人物についてのクエリーが増える。また、目立ってアメリカからの投稿が増える。

(9) 飯倉照平編「南方熊楠 高木敏雄往復書簡」『熊楠研究』五、二〇〇三年、二六二〜二六三頁。

(10) 『全集』七巻、一九七一年、一七頁。

(11) 『全集』別巻一卷、一九七四年、一二三頁。

(12) ただし、ノートとリプライに関しては、長文すぎて分割掲載されたものがいくつか確認されている。「神々などの足跡」、「驚石」などである。クエリーは短文が多いこともあり、そうした例は認められない。

(13) 一九〇七年四月六日号に出たダグラス・オーウェン「丸」など。拙稿『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌のなかの日本を参照のこと。

(14) クエリー関連の書簡類、ノートおよびリプライ関連の邦文論考および書簡類は『南方熊楠英文論考(ノーツ・アンド・クエリーズ)』誌篇を参照のこと。

(15) 未掲載になったものはリプライが圧倒的に多い。他の投稿者の回答と重複したり、日本から送っているためにタイミングが遅くなったりしたためだろう。

(16) 拙稿「熊楠と比較民俗学―『神跡考』の民族誌を中心に」『季刊民族学』一三九、二〇一二年。

(17) N&Q, June 20, 1925, p. 441.

(18) N&Q, Nov. 21, 1914, p. 408.

(19) William H. Peet, 'Pausanias', N&Q, June 29, 1912, p. 518.

(20) 「人間の皮でつくった太鼓」(N&Q誌、一九二四年二月二三日号)と「人の皮で張った太鼓」(『日本及日本人』七月一日号)、「ソドムの裁判官たち」(N&Q誌、四月一日号)と「疵付けられ料を疵付けられた者に課す国法」(『日本及日本人』三月一日号)、「ジェルベールの逃走の伝説」(N&Q誌、六月二八日号)と「方術をもって身を橋下に隠した話」(『日本及日本人』七月一日号)など一一点がある。

(21) 『全集』四巻、一九七二年、六五頁。

(22) 同、六七〜六八頁。

(23) 『全集』三巻、一九七一年、六九頁。

(24) 『全集』二巻、一九七一年、二八七頁。

(25) 同、二八八頁。ペンスリーは「ミス・オルコット」としか書いていないが、オルコットは『若草物語』の作者として著名であり、熊楠も知っていたのか、「ルイサ・メイ・オルコット」とフルネームに改めている。なお、「リッル・メン」は日本では『第三若草物語』として知られている。同、二九〇頁。

- (27) 『全集』別巻一卷、一二三頁。
- (28) A. H. Cooper-Pichard, 'Mysterious Figures: Pictures with Moving Eyes', *N&Q*, July 11, 1925, pp. 29-30.
- (29) *N&Q*, May 14, 1921, p. 392.
- (30) 『全集』一卷、一九七一年、四九六頁。
- (31) 『南方熊楠英文論考〔フーツ・アンド・クエリーズ〕誌篇』で飯倉照平が指摘。
- (32) 『全集』二巻、二七〇頁。